

学校でやる気をひき出すか

かみや かずひろ  
神谷 和宏

愛知県刈谷市立かりがね小学校教諭

# 子どもの得意なところを発見する

## 日本の子どもの自己イメージの低下

ここに、財団法人日本青少年研究所が二〇一一年一月に発表した「高校生的心と体の健康に関する調査——日本・アメリカ・中国・韓国の比較」という資料があります(表)。これによると日本の高校生は諸外国に比べると自己イメージが極めて低いことが理解できます(1)。

私は、日本の子どもの自己イメージの低下には、次の三点が関係していると思っています。

- (1)自己イメージを下げる言葉遣いをしていぬ
- (2)好きなことをしていない
- (3)目標がはつきりしていない

表 高校生の自己イメージ 単位(%)

	米国	中国	韓国	日本
私は価値ある人間だと思う	57.2	42.2	20.2	7.5
自分を肯定的に評価するほう	41.2	38.0	18.9	6.2
自分に満足している	41.6	21.9	14.9	3.9
自分が優秀だと思う	58.3	25.7	10.3	4.3
親は自分を優秀と評価する	91.3	76.6	64.4	32.6

(財団法人日本青少年研究所, 2011<sup>(1)</sup>より筆者作成)

これらを順に説明します。まず、一つ目です。最近の多くの子どもたちは、否定的な言葉、たとえば「ウザイ」「キモイ」「バカ」「最悪」「死ぬ」「駄目だ」……を頻繁に口にします。また、テレビや新聞でも人を馬鹿にした番組や犯罪記事の嵐です。ほとんどの子どもたちは、テレビゲームを毎日行っていますが、その大半は「戦い」です。キャラクターが死ねば、簡単にリセットできます。日常的に、このような言葉や

ゲーム体験に囲まれた生活を送っているので自己イメージは高まらないでしょう。

二つ目は行動の原理に当たるものです。「人は誰でも、快楽を求め、苦痛から逃げよつとす」ということです。平たく言えば、「子どもは、好きなこと、楽しいことしかやらないし、嫌なことから逃げる」ということです。精神分析学者フロイトによると、人間の精神構造は「イド、自我、超自我」から成りたち、そのイドとは、人の精神エネルギーの源泉に当たるものと説いています。このイドは快楽原理に基づいて、本能のままに「今すぐあれがしたい」「これがしたい」という欲求を出して満足を求めるといふものです。

しかしながら、子どもの日常は、そんなに楽しいことばかりではありません。子どもにとつて勉強することが、いつでも好きで好きでたまらないといふことではないでしょう。

そこで、三つ目の「明確な目標」が必要になります。例えば、明日、漢字の書き取りテストがあるとしたら、でも、勉強をする気がしない。そこで、二つの選択肢が考えられます。「勉強をしないで悪い点を取る」「勉強をしてよい点を取る」です。そのとき、テストの結果

が返却されたときのことを想像し、本当はどちらがいいのかをイメージさせます。これがこでいう「明確な目標」になります。

つまり、日頃から「やれる」「大丈夫」「自信がある」……のような言葉を使わせて、好きなこと・楽しいことを目標に、明確にして取り組ませることがやる気をひき出し、持続させる方法なのです。

## 教師に「気づく力」があるか

繰り返しになりますが、子どもの得意なものは何かと尋ねられたら、それは間違いなく、子どもが「好きなこと」「やっていると楽しいと感じるもの」です。教師は、日頃から注意深く観察していれば、子どもが笑顔で取り組んでいるものは自然と分かるものです。もし、この点に気づかないとしたならば、教師としての「気づく力」がないといわれても仕方ありません。

さらに、最近「気づく力」も落ちてきているように思われます。その原因は三つあります。

一つ目は、教師は「自分の関心以外を見る力」が弱くなっているということです。

特に若い教師に多く見られるものに、自分の嗜好や興味範囲、自分の物の見方、考え方と合わない子どもとは、あまり接触は好まないという傾向があります。自分の居心地がよい小さな世界ですませてしまい、子どもとの接触、コミュニケーションの必要性を感じなくなっていることが原因です。また、ベテランの教師には、自分はずっとこの方法で取り組んできた、そして、それなりの実績も残してきた、という成功体験が邪魔をして、「自分の関心以外」や「自分の成功体験とつながらないこと」には、否定的な見方をしてしまっていることがあります。また、年を重ねると、これまでの知識体系や経験を越えた新しい発想や着眼点についていくことが、とても面倒になってしまっているのです。

二つ目は、「表面的な現象しか見ていない」ということです。

例えば、宿題をいつもやれない子どもがいたとします。そのときに、宿題をしないという表面化した問題に、対症療法的な処置をほごすだけで終わってしまうことがあります。すると、また、別の形で「問題」が引き起こされます。根っこの原因が解消されていなければ、これが繰り返され、問題解決に奔走させられ、トラ

どんな好きなことでも、どんなに楽しくても、いつまでも続けられるものではありません。

例えば、ハンバーグが好きな子どもがいたとします。今日も、明日も、明後日も、次の日もずっとハンバーグばかりを一週間食べなさいと言われたら、普通は嫌になっってしまう。これは大人でも同じです。

ピアノが好きで、毎日六時間ピアノの練習をしている子どもがいたとします。しかし、発表会もなく、誰が開いてくれるというわけでもなく、「上手だね」とほめられず、ずっと部屋で練習を続けているとします。ピアノが上達するには数年の練習が必要ですが、果たしてその長い練習期間に耐えられるでしょうか？

無理です。だから、発表会に参加したり、コンクールに参加したりしながら、自分のマンネリ化を防ぎ、モチベーションを保ち続けるのです。

人は誰でも「自分を認めてほしい」という承認の欲求をもっています。子どもだって、教師だって、保護者だって、誰だって、同じです。

D・カーネギーの「人を動かす」という有名な自己啓発書の冒頭で最も強調していることも、このことです。人は皆、例外なく「自分は重要な人物だ」と思っ

ブルが収まらないという状況が続くでしょう。そして、三つ目は、「辛抱強さが少なくなってきた」ということです。

これは、子どもを成長させる上で何が重要かを見極めるということです。そのために手間暇かけて貰おうとする姿勢が不足しているということです。

学校では、学習などで効率を求めることはよいことなのですが、付加価値を生み出すための、「手間をかけて辛抱強く行う」ということさえも効率化してしまう傾向が、特に若い教師の中で増えています。

分かりやすい例でいうと、ほとんどの人は、年賀状を書いていると思いますが、パソコンで宛名も文面も印刷して送るだけの人が少なくなりました。しかし、手書きで丁寧に書いてある人の年賀状が心に残る経験を持っているはずは

ある期間子どもへの観察を、辛抱強く繰り返している、「おや？」とか「輝いているな」と思う瞬間があり、そこから意外な長所が見つかることがあります。

### マンネリ化から脱却させる

ています。これは本能に近いものです。

ですから、子どものモチベーションを上げるための手段は、「認めてあげる」と「に尽きると言っつてよいでしょう」。

承認の欲求は、子どもが行動を持続させる原動力になります。子どもにとつて、周囲の教師や保護者から、うまく承認の欲求を受けることができると行動が持続するようになるのです。

学級内でよく見られる手法として、子どものがんばりや成果を表やグラフにして「見える化」することもあります。これも一種の承認の方法だといってもいいでしょう。しかし、実際には、学校という組織の中では「常に全員を認めてあげること」というのは、なかなか難しいようです。だから、学校内で承認の欲求を満たせてもらえない子どもの中で、歪んだ承認の欲求を他で発露してしまうこともあります。これが、非行やイジメ、引きこもりなどとなって現れたりします。

### 「A B C Dの法則」を覚へ

私は子どもから、こんな質問を受けたことがあります

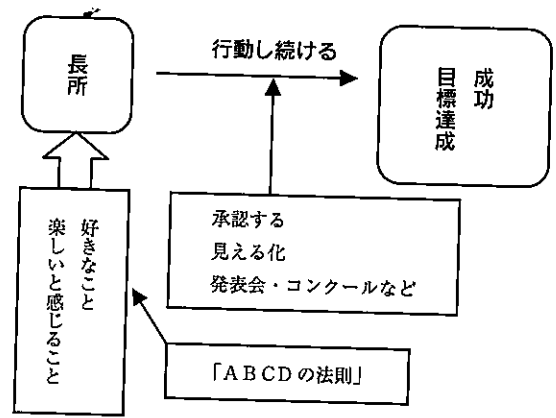


図 子どものやる気を支えるしくみ

す。「私の長所は何でしょう？ 何が得意で、どんな才能があるか分からない。特に好きなものもない」というものです。皆さんはこのように回答をしましょうか。そのとき私は、いつも「ABCDの法則」を貫きななから」と答えるようにしています。

「ABCDの法則」とは、ビジネスの世界でよく言わ

れる「ABCの法則」にDを付け加えたものです。

- (A) 当たり前のことを、
- (B) バカにしないで、
- (C) ちゃんとやれる人が、
- (D) できる人になれる

という文言の頭文字です。例えば、「人と会ったら挨拶をすること」は当たり前のことです。誰も見ていなくても「しみを拾う」とか「清掃」への取り組みはどうですか。このようなことを、誠実にしっかりとやるということです。幾度か全国優勝を達成した長崎県立国見高校のサッカー部元監督の小嶺忠敏さんは、サッカーがうまくなるには、まず「挨拶、返事、後片付け」がしっかりとできることだと言っています。その結果、人間としての力が身に付き、自分の長所や使命が見えてくるようです。

〈文献〉

- (1) 財団法人日本青少年研究所「高校生的心と体の健康に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較」二〇一一 <http://www1.odn.ne.jp/youth-study/>
- (2) 神谷和宏「教師のための子どもが動く！コーチング50」金子書房、二〇一一
- (3) D・カーネギー(著)、山口博(訳)「人を動かす」創元社、一九九九
- (4) 小嶺忠敏「国見発 サッカーで「人」を育てる」日本放送出版協会、二〇〇四